



秋の夜長に思う

日本列島をゆっくり縦走した台風25号の通過後は次第に気温も下がり秋の気配を感じるようになり、爽やかな秋晴れと共に過ごし易い日々を楽しむことができる。10月からは例年のようにインフルエンザの予防接種が始まり、多くの方が実施して近年の大流行は見られなくなった。私が開業した昭和の中頃は毎年のように大流行があり、半強制的に予防接種が行われていた。他の伝染病に対しても予防接種があり、色々の感染症から身を守ることができ、この免疫作用のお陰で私たちは健康を維持し長命に恵まれていると思われる。

このように人間の免疫反応は生命と深い関係にあって、今年のノーベル医学生理学賞に輝いた京大の本庶教授の研究は体内に入った細菌やウイルスを攻撃する免疫反応という仕組みを利用してガンの治療をする新しい薬の開発につながる研究をした業績に対して選ばれたものである。その薬は「オブジーボ」と言って4年前からガンの治療に使われているが、とても高価な薬で今後の研究開発が期待されている。この薬は誰にでも効くわけではなく、他の薬や治療法を組み合わせたり、使い方を工夫したりして、多くの患者さんに有効な使い方を探していく必要があり今後もしばらく研究を続けたいと述べている。

医学の進歩は日進月歩であって、かつて人生60年の時代から百年を超えるほどになって来た。しかしこれとは裏腹に心配されるのは少子高齢化現象の進展であって、人口構成表を見ると以前とは逆転した形で日本人の人口将来像が心配される。現在の出生率は1・5と低く人口減少の社会現象は仕方ないものと思われるが、これはロボットで賄えるようなものではない。

私は毎週日曜日の朝7時45分から僅か15分の短時間のNHK番組1で放映される“さわやか自然百景”を楽しみに視ている。これは自然界での小動物の成長過程や動態変化を日本全土の様々な場所や時間帯や行動計画で、根気強く狙って、美しく鮮明に捉えた映像を収録した教養番組と思っている。それには動物が生まれ成長する様子、種族保存の本能行為から、子どもの成長を見守ったあと生涯を終えるという自然界の姿に感動することがある。人間も種族保存の本能行為を疎かにしない気配りが求められると思うのだが。

私は今年80歳代最後の歳で、来年は卒寿を迎えることになり、改めて歳をとったものだと思っている。古くから“八十三つ子”ともいわれ、人は歳をとり八十歳以上になると三歳児のように無邪気になると思われている。しかし今の

自分を見て三歳児とは考えられないが、日常生活において何処ということもなく体の倦怠感があり、行動が不確かになった思いがする。

逆に“三つ子の魂百まで”ともいわれ三歳児ごろの生活習慣や知的行動はその後の生きざまに伝わるもので、子供の躾や教育の大切さを教えていると思う。更に我々高齢者から見る子供たちの多くは孫か曾孫であると思われるが、一般に孫特に曾孫は“とても可愛い”と思っている人が多い。ではなぜそんなに可愛く感じるのか、その理由について広島大学の岡本祐子先生の説明によると

○孫に慕われることで自分の存在価値が感じられて嬉しい。しかし一般的に定年退職の時期などで自分の存在感や自尊心を失うもので、それを取り戻したい気持ちからだと思われる。

○孫たちに接することで自分の命がしっかり引き継がれていると感じて安心でき、精神的安定に繋がる気持ちからそう思われると考える。

○自分の人生を振り返り、これで良かったのかと自問自答し、孫や曾孫の子育てを再体験して自己満足を得るためともいえるのではないのでしょうか。

更に人によっては別の考えとして、実子に対してはきちんと育てる責任があり、手抜き出来ない義務が課せられるものである。しかし孫や曾孫にはそれがなく、気を楽しんで純粋に可愛がってあげればそれで良いとの責任逃れの立場でいられるからともいわれる。

話は変わり、倉嶋厚（お天気博士）の随筆（晩秋初冬）の一部から引用すると「十一月七日は立冬。東洋の暦はこの日から始まる。東の冬はすこし早すぎるし、西の秋は遅すぎるように思うが、季節は今晩秋初冬である。秋の移り変わりは早く、寒波が来て数日経つと木の葉の色が変わるのが分かる。木枯らしが吹くたびに林の梢が明るくなり、イイギリの赤い実や、ムラサキシキブの青紫色の実が青空に映え、柿の実が夕陽に輝く。雑木林のカエデは他の木が葉を落としたところに、通り過ぎていく秋の後ろ姿を飾るかのように赤く染まる。しかし和歌でも漢詩でも、秋の悲しさを強調したのは生産現場から離れた貴族や文化人たちで、農耕民族にとって秋は収穫の季節であって、悲しいものではなかったはずだという。あと1か月半経つと冬至、この日を過ぎると太陽はもう春に向かって歩きはじめる。南国の小春日和はいつそう温かく感じられる。」

